

障害学生支援の現場における専門性を問う取り組み

——部署内研修を通して得た「相対化」の視点——

吉田 朝香¹，村田 淳²

【要約】

京都大学 DRC では、スタッフの専門性向上を目的とした『アドバンスドセミナー』を定期的実施している。2024年3月のセミナーは、テーマを「障害学生支援の現場における専門性とは何か」とし、東畑開人氏を招聘して行った。本セミナーでは、支援について社会モデル－個人モデル、ケア－セラピーといった補助線を引きながら、専門性を相対化する視点を得ることができた。また、多職種で構成される本領域では、それぞれが現場における「善」をインストールする過程で葛藤があることを共有できた。さらに、社会の変化により現場の「善」も変化する中、同じ領域で働く仲間とのつながり等から「相対化」の視点を得て、自身の専門性について考え続けることが重要であることが分かった。

【キーワード】

社会モデル－個人モデル，ケア－セラピー，価値の相対化，多職種連携

1 はじめに

京都大学 DRC（学生総合支援機構 障害学生支援部門；以下 DRC）では、スタッフの専門性向上のため、『アドバンスドセミナー』と称する研修を定期的実施している。毎回のテーマは、その時点または今後必要になると考えられる知識やスキル、マインドセット等により決定し、そのテーマの専門家を講師として招聘する。単に知識を学ぶだけでなく、講師とスタッフによるディスカッションに重きを置き、それぞれが感じたことや考えたこと等を言語化して自身に落とし込むとともにスタッフ間で共有し、実際の業務に応用していくことを目標としている。

2024年3月のセミナーは筆者が企画を担当し、東畑開人氏（白金高輪カウンセリングルーム；臨床心理士・公認心理師）を招聘して「支援する人の『動くところ』と『止まるところ』——障害のある学生を支援するという専門性を問う——」を実施した。本論は企画経緯や当日のレクチャーと鼎談およびディスカッションの概要、実施後の参加者の反応を振り返り、障害学生支援における専門性を考える際の一視点について述べるものである。

2 本研修の企画経緯

本セミナーは、筆者が DRC に入職した当初から考えてきた「自身の専門性はこの現場でどのように役立ち、どのような限界があるか」という問いから企画された。本節では筆者の経歴及び前職の特徴と DRC の特徴を対比させた上で企画の背景にある筆者の思いについて説明し、東畑氏の著書等との出会いを経て本セミナー企画に至った経緯を述べる。

¹ 学生総合支援機構・障害学生支援部門・特定専門業務職員（DRC・コーディネーター）

² 学生総合支援機構・障害学生支援部門・准教授（DRC・チーフコーディネーター）

2.1 筆者の経歴と前職の特徴

筆者は臨床心理士と公認心理師の資格を有し、障害学生支援に携わる以前は教育センターの相談員およびスクールカウンセラーとして初中等教育現場で勤務していた。筆者が勤務していた教育センターは、主に教員が担当する教員研修・研究の機能と臨床心理士・公認心理師が担当する教育相談業務で構成される。教育相談業務のうち、筆者の主たる業務は児童・生徒本人や保護者を対象とした来所・学校出張相談、知能・心理検査の実施、教員へのコンサルテーション等だった。いずれも子どもの言動の背景にある気持ちや特性を整理し、子どもや保護者がそれぞれの課題と向き合えるようサポートするという、個人の内面へのアプローチを目的としていた。一方で、学校やその他関係機関との連携といった環境面へのアプローチや、子どもの発達や自立を促す工夫やツールの提案等の具体的な支援も行っていた。

2.2 DRC の特徴

DRC の第一の特徴は、障害の社会モデル（障害は心身に機能障害のある人と周囲の環境・社会の相互作用によるものであるとする考え）に基づいて相談・支援を行い、主に環境や社会が生み出す障害（社会的障壁：disability）にアプローチすることである。また、学生を「学びや研究の主体者」と考え、学生が主体的に学ぶ権利を保障することを部署の目標としている。面談では学生の困りごとを整理し、専門的な知見やノウハウ、支援機器などを活用した環境調整や支援を行う。面談は基本的に予約制だが、学生が困った時にすぐに対応できるよう予約外の面談も可能である。

もう一つの DRC の大きな特徴は、ユーザー（主に学生）を中心に置き、様々なリソースを提供するという考え方をすることである。なかでも、スタッフや場所等もリソースとして位置づけている点は特徴的である。DRC は多様な専門性を持つスタッフで構成されており（社会福祉士や精神保健福祉士、公認心理師、臨床心理士、介護福祉士、特別支援教育士等）、各々が経験してきた領域も多岐にわたる（医療や教育、福祉、一般企業等）。このことには、障害学生支援という領域特有の性質が大きく関係している。障害のある学生への支援は、症状や特性、状態によって求められる支援が異なる上、安定した学生生活のためには修学以外の様々な場面（日常の家事や体調管理、予定管理等）での支援が必要になる場合も多い。加えて高校から大学への適応や社会移行等、学年によっても必要な支援が変化する。そのため、この領域全体が様々な専門性を持つ人々で構成されており、DRC はその縮図と言える。DRC では利用学生に担当者が就くが、その時々ニーズに応じて、必要な専門性を持つスタッフに関わることができるようになっている。

2.3 筆者の DRC 入職後の体験と本セミナー企画に至る経緯

筆者は前職の現場で10年間勤務し、自身の仕事を外側から捉え直す必要性を感じて退職した。DRC に入職すると前の職場との目的や性質の違いが顕著で、筆者は「職場の価値観」と「多職種連携のイメージ」の2つに大きなギャップを感じた。

1つ目の「職場の価値観」について、社会モデルが筆者に与えたインパクトは大きかった。DRC が環境調整を強く意識する一方、前職の現場は相談者の内面を扱うことを重視していた。また、DRC は「他機関・部署と連携する」といった「動く」要素が多いのに対し、前職は相談者と一緒に「現実と向き合い、考える」「子どもの変化するタイミングを待つ」といった「止まる」要素が多い。もちろん、DRC でも学生の心理面をアセスメントし、一緒に考える等の「止まる」要素があり、前職においても他機関連携等の「動く」要素はあるが、現場によってそれぞれの塩梅が異なる。さらにこのような各現場の特徴は、相談者とスタッフの関係性にも現れる。DRC では、前述の通り学生のニーズに応じて担当者以外のスタッフに関わる等比較的オープンな関係性がある上、学生は面談予約がなくても立ち寄り、オープンスペースでスタッフと雑談を楽

しむこともある。その一方、前職では相談者－相談員というクローズな関係性を基本とし、予約した日時に面談する。このように、DRCは「日常性」のある場所であると言える一方で、前職は「非日常性」の意味を持っていることが特徴であった。東畑（2019）によると「ニーズを満たす」「日常」「開放」といった要素は「ケア」，「傷（課題）に向き合う」「非日常」「閉鎖」といった要素は「セラピー」に分類され、2つの職場の性質はそれぞれに当てはまる。このことから、筆者の戸惑いの背景には、DRCが前職に比べてケアの成分が多かったことがあると考えられる。

また、2つ目の「多職種連携のイメージ」について、DRCに入職するまでは、多様な専門性を持つ人々が一つの同じ目的を共有し、様々な視点からアプローチするというものだと考えていた。実際に、スタッフの専門性やキャリアによって視点やアプローチが異なっているにもかかわらず目標は共有でき、筆者が新しい視点を得ることも多い。しかし、他のアプローチでは筆者が重視してきたものが取りこぼされると感じることもあり、自身の考え方がこの現場には合わず、役に立たないのではないかと悩むこともあった。

そのような中、「居るのはつらいよ」（医学書院，2019）や「野の医者笑う」（誠信書房，2015）といった東畑氏の著書を読んだ。それらの著書では、教科書には載っていない現場ごとの臨床があることが述べられ、「心の治療者とは何者か」「心が癒されるとはどういうことか」といった問いを通じた臨床心理学の捉え直しが行われていた。さらに、東畑氏を講師に招いた研修会では、時代や社会の変化により、求められる心理療法や心理士そのもののありようも変化していることが語られていた。このような東畑氏の言説に触れ、筆者は自身の不安や葛藤が言語化された思いがした。同時に、臨床心理学を医療人類学の視点や時代の変遷から捉え直すという方法を障害学生支援にも応用し、障害学生支援の領域を外側から見て考えることで自身の専門性や役割を考え直すことができるのではないかと考えた。また、多様な専門性やキャリアを持つ人々が集まるこの領域でこそ共有できる戸惑いや葛藤があり、それらを話し合うことが今後につながるのではないかと考えた。このような経緯から、東畑氏を講師とし、部署内スタッフだけではなく近隣大学の障害学生支援に携わる職員にも呼びかけてセミナーを実施することとなった。

3 概要

3.1 当日の開催概要

本セミナーの当日の開催概要は以下の通りである。

◆日時

2024年3月9日（土曜日）13：30～17：30

◆場所

京都大学 国際科学イノベーション棟（5階）会議室5a・5b

◆講師

東畑 開人 氏（白金高輪カウンセリングルーム）

◆対象者

全14名

- ・京都大学 DRC コーディネーター（以下「Co.」とする）およびスタッフ（6名）
- ・主に京都市近郊の大学にて障害学生支援に関する部署に所属している教職員（8名）

◆実施内容

《第一部》

13：30～13：35 趣旨説明

13：35～14：35 【講演】講師：東畑 開人氏

14：35～14：45 休憩

14：45～15：45 【鼎談・質疑応答】鼎談者：東畑氏，村田 淳，吉田 朝香

15：45～15：55 【第1部クロージング】

《第2部》

16：15～17：30 【ディスカッション】東畑氏・DRC スタッフ

3.2 講演

はじめに東畑氏の経歴紹介があり，職場の領域を変えながら自分の仕事が一休何なのかを考えてきたということが語られた。自分の仕事について考える上での補助線として二分法を使って考えていくという断りがなされた上で，1つ目は「心か社会か」という，対人援助職における2つの介入の対象をテーマとして展開された。このパートのポイントは，個人モデルと社会モデルをルビンの壺の「壺」と「横顔」に見立てた説明にあった。すなわち，「壺（心・個人）」を見ている時は「横顔（環境・社会）」が見えなくなり，「横顔」を見ている時は「壺」が見えない，しかし同時に，「壺」が「横顔」を作り「横顔」が「壺」をふちどっているという説明である。このことを踏まえて東畑氏は，心のことだけを考えることがいかに加害的かについて述べる一方で，社会には変わらない部分があり，そこをなんとか調整して飲み込んでいく心のポテンシャルを考えることも必要であると述べた。

次に，「ケアとセラピー」という2種類の支援のあり方がテーマとなった。ケアとは傷つけないこと，ニーズを満たす（つまり環境側を変える）ことであるとし，それによって人は具体的な不便がなくなるだけではなく，心が他者に理解されている感覚が得られるという，ケアの実存的な側面についても言及された。その反面，ケアがうまくいかない状況とは支援者側が相手のニーズを分からなくなっている時であり，相手は孤独になってしまうという，ニーズの理解と傷つきが表裏一体になっているという話もあった。他方，セラピーとは傷つきと向き合い，ニーズを変更することであるとし，環境側に変わらない部分がある時に，心の膜で調整できるようにする営みであると説明された。そしてケアのないところのセラピーは暴力である一方で，ケアだけでは成り行かないこともあるとし，どの現場にもケアとセラピーがあること，そのタイミングや成分のバランスを考えていくことに専門性があると述べた。

これらのことを踏まえて，最後に「善き支援とは何か」が語られた。それぞれの現場ごとに「どのような人間が善いか」の像があり，前述のケアとセラピーのバランスは，その現場で行われる支援がいかなる善を目指しているかによって異なるという説明があった。また，多職種連携は現場ごとの「善」を言語化してうまくインストールされた時に可能になるものであり，同時にそれを客観的に捉える視点が支援の持つ加害性の軽減につながると述べた。最後に，東畑氏としては「つながり」があることを価値とし，つながりを処方し，マネジメントすることが対人援助の専門性の一つだと考えていると話した。

3.3 鼎談

まずチーフ Co. の村田氏が講義中の「現場ごとの“善”をインストールする」というキーワードを取り上げ，日本における障害学生支援の領域は，その歴史の短さから何が善であるかをまだ定義されていない状況

であるとした。一方で、すでに何らかの専門性や経験を持つ人でも、この領域における「インストールするものを探す」行為の中で、自身の専門性との葛藤を抱えていることを述べた。筆者もまたその一人であり、本鼎談では自身の経験を材料として、障害学生支援における専門性とは何かを考える場としたいという趣旨説明がなされた。

筆者からは自身の経歴と DRC に入職した際に感じたことを話し、東畑氏の著書や講義内容と関連付けて次のような2つのトピックを提示した。(i) 職場によるケアとセラピーのバランスの違いを東畑氏がどのように調整し感覚を掴んでいったか；社会モデルの考え方が根底にある DRC での業務は、筆者のアイデンティティを大きく揺るがしたという経験を語った。その中で、入職して間もない頃に村田氏から「Co. もリソースの1つである」と言われたエピソードを取り上げ、合理的であると感じる一方、学生と Co. との間に築かれてきた「心（信頼、関係性）」の部分が見落とされてしまうと感じたことを話した。そのような筆者の経験を「居るのはつらいよ」にある東畑氏の経験と重ね、東畑氏が「ケアの入り混じったセラピーをするようになった」（東畑，2019）プロセスでは、何がインストールされていったのかを質問した。また、(ii) 多職種連携の職場における面白さ・難しさとはどういうところだと思うか、ひいては社会モデル／個人モデルとどう付き合うかについて尋ねた。前述のように、筆者にとって多職種連携は「一つの山頂を目指して複数のルートで山に登る」というイメージだったが、そもそも「複数なのは山頂そのもの」（東畑，2023）だと気づいたという話をし、ある印象的なエピソードについて述べた。それは Co. が学生から感謝された時の村田氏と筆者の感じ方の違いで、村田氏は学生の気持ちを嬉しく思う一方で、学生が Co. に感謝しなければならない状況（つまり disability が生じている状況）が生じていることを忘れてはいけないと考えるのに対し、筆者は自分が感謝されるために支援しているのではないが、学生が誰かに感謝したいと思えるような関係性を持てたこと自体は肯定的に捉えても良いのではないかと考える、というものである。同じ出来事に対して村田氏はそこに社会を見、筆者は心を見ているという面白さと、それらの視点をどのように自分の中に織り込んでいくかという問いを投げかけた。

これらの質問に対し、まず (i) については「お節介」をインストールしたという話があった。それぞれの専門分野では何らかの倫理に基づいた教育がなされているが、実際の現場では教科書に載っていないことが起き、現場知として共有される対応がある。東畑氏の勤務した精神科デイケアの場合は「お節介」がそれに当たり、東畑氏も当初は戸惑ったようだ。しかし一度それを真似てみて後から振り返り、その行為を心理学的に位置付けるという作業をする中で意味がわかり、「現場における善」も分かるようになっていったということだった。

(ii) のエピソードについては、まず村田氏の持つ特権性に対する意識や、社会を変えなければいけないという志向が背景にあることを指摘した。これとは対照的に、東畑氏自身は個人のことをずっと考えており、だからこそ社会に目を向け、相対化して考えているという話があった。これに対し、村田氏は「専門家もリソースの一つである」としたのは、ユーザー中心の視点だけではなく、私たちが現在進行形で作り上げていると感じている現場知も、ともすればドグマ化してしまうことへの自戒の意味もあると述べた。さらに、合理的配慮を申請していた発達障害の学生が、その学生自身の内的変化や工夫によって配慮を必要としなくなっていった例を挙げ、社会モデルだけでは重要なものを見逃してしまう可能性があり、そのことを意識した上で社会モデルで考える必要があるとした。これに対し東畑氏は、心理士においても、社会モデルをインストールすることで問題を社会に起因させやすくなり、個人の内面を考える視点を持たなくなってしまうことへの危惧があることを述べた。これらのことから、個人モデルと社会モデルをはじめ様々な専門領域における価値観やメソッドは、ある一つのものを善として固定化すると思考停止を招く可能性があり、それぞれの専門性や価値観等によって排除されるものは何かという視点を持つことが必要ではないかという話で締め

くくられた。

3.4 ディスカッション

ディスカッションはDRCスタッフに限定して行われた。それぞれの経歴や専門性とDRCで業務を行う中での葛藤について話し、それをもとに様々なテーマで活発な議論が展開された。ここでは筆者の印象に残った以下の2つのポイントに絞って記述する。

1つ目は、心理学を専門としないスタッフの、心に触れることに対する「引け目」についての話である。障害学生支援の現場では、学生を取り巻く環境面にアプローチすることを主な目的としている。支援のプロセスにおいて心理面に触れることは避けて通れないことである。研修の事前学習として東畑氏の著書『ふつうの相談』（2023）を読んでいたこともあり、数名のスタッフが、学生の心に触れることへの向き合い方を通じて自身の専門性について考えていると語った。これに対し東畑氏は、まず個人の内面を扱うことが崇高であるという偽りの信仰があるとし、そのためスタッフが「引け目」を感じていることを指摘した。その上で、障害のある学生との「ふつうの相談」には必要なのは、その学生たちにとって世界がどう見えているかについての専門知識であり、学生の言葉にならないリアリティを現場における専門用語で語り直すことが専門性の一つであると述べた。反面、それは暴力的に作用する時もあるが、その暴力性をゼロにしようとする専門家ではなくなってしまうのではないかと話した。これについて村田氏も、学生が支援者に依存しないように配慮する一方で、一定の依存を引き受けることでうまくいくバランスがあることも確かだと述べた。

2つ目は、このディスカッションにおいてもスタッフ間の価値観の違いが如実に表れていたということである。村田氏は、専門性や経歴が異なれば、同じ状況を見ても考える視点が異なり、その結果支援のあり方も少しずつ異なることを指摘した。一方で、このことについての賛否はあるものの、スタッフ全員でチューニングした支援が「善」であるとも限らないと述べた。さらに、職場を知ることは重要だが社会は常に変化しており、それに伴ってその職場における「善」も変化すると述べ、その変化についてもそれぞれの視点で考えられることがこの領域の強みであると話した。

4 参加者の属性と感想・質問

第1部の鼎談後に質疑応答の時間を設け、またセミナー終了後には参加者に対しアンケートへの回答を求めた。参加者の属性や感想・質問は以下の通りである。

4.1 参加者の属性

参加者の障害学生支援の経験年数は1～12年で、取得している資格や免許は精神保健福祉士、臨床心理士、公認心理師、社会福祉士、学校心理士、特別支援教育士、教員免許等であった。

4.2 講演について

「以前から社会モデルの限界を感じる場面があったが、セミナーで整理された」等、社会モデルー個人モデル、ケアーセラピーのような業務を行う上での視点の整理や見直しをしたという感想が見られた。また、「日頃感じているが言葉にならなかったことを体系的に論じてもらえた」等、日々感じていたことがセミナーで言語化され、改めて考え直す機会になったという感想が多く寄せられた。

4.3 鼎談について

「鼎談者がどのように悩み、落とし所を見つけていったかの過程を見られたことが学びになった」(自分は)経験年数が少なく、これから自身の中に葛藤や課題が生まれてくるかもしれないと思った」等、鼎談を自分の経験と照らし合わせながら、自身について考えたという意見が見られた。また、「社会を見る視点によって話題が展開していく現場がすごく面白かった」という感想もあり、社会モデル－個人モデルの視点を行き来しながら議論が展開したことも本セミナーの醍醐味であったと思われる。

4.4 本セミナーに参加する前後で自身における変化があったか

「自分の専門性と向き合う時間を作ることができ、心に揺れが残っている」「以前は大事にしていたのに忘れていたことに改めて気づいた」等、普段の業務や自身の専門性を改めて見直す機会になり、今後の課題を考える機会になったという感想が見られた。さらに、「支援について揺らぐ気持ちを大切にしたいと感じた」という感想も寄せられ、自身の専門性や支援を相対化して考えるという本セミナーの本質的な目標が共有されたことが窺えた。

5 考察

本セミナーでは、社会－個人、ケア－セラピーといった視点を行き来しながら、障害学生支援の専門性について相対化して考えることができた。この「視点の行き来」そのものが、一つの視点への固定化を防ぎ、専門性を高めていく上でのポイントであったように思われる。

議論においては、専門性やキャリアによって立ちやすい視点やちょうど良い塩梅が異なっており、それぞれに葛藤しながら現場の「善」をインストールしていることが共有された。また、それぞれの現場は社会とのつながりの中にあり、社会の変化に伴って現場の「善」も変化するという話は、障害学生支援の今後において特に重要な視点だと感じた。前述の通り、この領域はまだ歴史が浅く、現在も発展の途上にある。今後この領域が体系化されていく中で、現在の現場で行われていることが「善」として固定されてしまうことのリスクを念頭に置いておく必要があると思われる。

このように日々の業務全体に対してメタな視点を持ち、専門性の可能性と限界の両方に目を向けることを実践するためには、自分の中に湧き起こってくる「本当にこれで善いのか？」という気持ちに目を向けることが大切だと考えられる。日々の業務の中、それを可能にする一つに、同僚や同じ領域で働く仲間との「つながり」があると思われる。本セミナーのディスカッションの際、それぞれのスタッフが日々の葛藤を話しかったことは、筆者に視点の転換をもたらした。例えば、筆者がケアの要素が多い支援に躊躇するのと同様に、セラピーの要素が多い支援に躊躇するスタッフがいることや、筆者が支援者側の暴力性を不可避のものとして考える一方で、別のスタッフはその状況に疑問や躊躇を感じる事等、それぞれの感じ方の相違を実感できたように思う。その結果、普段の執務室での会話の中で筆者が何となくひっかかっていたことについて納得がいき、今後「本当にこれで善いのか？」と思った時、自身の業務を捉え直す視点も得られたように思われる。また、このようなスタッフ同士のインフォーマルな「ふつうの相談」に、多職種連携の基本があることも体感できた。先に述べた、社会とのつながりの中で現場の「善」をアップデートしていくことにおいても、このようなヨコのつながりが重要であると思われる。

6 おわりに

本セミナーは、多くの参加者が自身の価値観や専門性、日々の業務を俯瞰する機会となったと思われる。しかし社会が刻々と変化する中で現場に求められるものは変化し、にもかかわらず、日々の業務に取り組む中ではそのようなメタな視点は見失われがちである。そのため、今後も今回のような機会を定期的に持てるよう意識し、自身の「専門性」や「善き支援」とは何かについて考え続けていきたい。

[文献]

笠井清登 [責任編集] 熊谷晋一郎・宮本有紀・東畑開人・熊倉陽介 [編著]. こころの支援と社会モデル トラウマインフォームドケア・組織変革・共同創造. 金剛出版, 2023, 288p.

東畑開人. ふつうの相談. 第3刷, 金剛出版, 2023, 204p.

東畑開人. 居るのはつらいよ——ケアとセラピーの覚書——. 医学書院, 2019, 360p.

東畑開人. 日本のありふれた心理療法. 誠信書房, 2017, 328p.

東畑開人. 野の医者は笑う. 誠信書房, 2015, 302p.